

1 研究主題

「教わる」から「学びとる」授業への改善をめざして
～ICTの効果的活用を通して～

2 主題設定の理由

(1) 社会の要請から

現代の子どもたちが活躍するであろう未来の社会は、AI技術の進歩やグローバル化等、変化の激しい世の中になることが予測されている。そのような社会を生きる子どもたちに必要となるのは、知恵の習得はもちろん、身の回りに起こる様々な問題に自ら向き合い、その解決に向けて多様な他者と協調しながら解決策を導き出していく力である。

今回の学習指導要領改訂において、授業改善の取組の一つとして挙げられているのが、「主体的・対話的で深い学び」の実現である。教師が「アクティブラーニング」の視点からの授業改善に取り組み、子どもたち一人一人の学びを確実にしていくことが求められている。

(2) 学校教育目標から

本校の学校教育目標は、『素直で思いやりと感謝の心にあふれ 健やかな心と体と知恵をもって 進んで行動する児童の育成 ～夢いっぱい 笑顔いっぱいの学校を目指して～』である。また、学校経営のテーマを『協働』『対話』『チャレンジ(学び続ける)』と掲げ、学校総体となって、「主体的・対話的で深い学び」の実現において、授業づくりに取り組んでいる。教師が「教える」授業から、子ども自ら「学びとる」授業を目指し、子どもたちの学習意欲を高めながら確かな学力をつけていくことが、学校教育目標の「進んで行動できる児童」の育成につながると考える。

(3) これまでの研究から

本校では、一昨年度から「主体的・対話的で深い学び」の実現のために、授業改善に取り組んできた。熊本市教育委員会から示されている「授業づくりの5つの視点」をもとに、ICTの効果的活用を踏まえながら、魅力ある「めあて」の提示や、児童が取り組みたいと感じる課題の提示、そして、自己の学び方や学習の深まりを感じられる振り返りの工夫に努めてきた。これらの積み重ねにより、「めあて」と「振り返り」のパターンが定着し、児童が自己の伸びや学んだことを認識できるようになり、学ぶ喜びや楽しさを感じることができるようになった。また、児童がタブレットを使って自分の考えを整理したり、それらを示しながら自分の考えを伝え合ったりする場面を意図的に設定したことで、学習意欲が高まり、進んで学び合う姿が多く見られるようになった。このように、一定の成果はあったものの、それらがどの程度の確かな学力の向上につながったのかの検証が十分ではなかった。今年度は、昨年度の取組を引き続き実践・検証していくとともに、児童のさらなる学力充実をめざした授業づくりの研究を進めていく。

3 研究テーマについて

(1) 主題、副題について

授業改善の視点として示されている「主体的・対話的で深い学び」の実現には、学習内容の一方的な教授ではなく、児童同士が様々な価値観を交流し合い自分の考えを深める活動を十分に取り入れる必要がある。また、授業者が児童に身につけさせたい力や指導事項を明確にもち、意図的に対話が生まれる場を設けることにより、質の高い学びが生まれることになるだろう。そして、児童が学んだことを自分の言葉で振り返り、自分の伸びや学んだことを認識できることが、学ぶ喜びにつながり、学習意欲を高めることへもつながると考える。新学習指導要領では、学習の基盤となる力として、「言語能力」「情報活用能力」「問題発見・解決能力」の3つが示されていることを踏まえ、「主体的・対話的で深い学び」の実現のために、熊本市教育委員会より、児童が「学びとる」授業への転換について示されている。本校においても、児童が主体的に課題に取り組み、自分の思いや考えを表現し、伝え合い学び合うような、「学びとる」授業をめざしていく。

また、「主体的で対話的な学び」を授業の中で具現化できるようにするために、タブレット等のICT機器は有効的な学習ツールである。副題の「ICTの効果的活用」には、私たち教師がそれらのICT機器の活用を含めた授業改善を重ね、効果的な手立てを考えていくことはもちろん、児童が学び合い伝え合う場面において、タブレット等のICTを効果的に活用することで、確かな学力向上につなげていくという意味合いを込めている。これらの教師の不断の授業改善により、毎日の授業の中で、子どもたちの「わかった」「できた」「伝えたい」の声が聞こえ、学ぶよろこびや楽しさを体得する子どもの姿をめざしたい。

(2) 具体的取組

「主体的・対話的で深い学び」の実現のために、熊本市教育委員会より「授業づくり3つのポイント」が示されている。児童主体の学びとなるよう、この3つのポイントを踏まえながらICTを活用した授業改善に努める。

①授業改善 令和版「学びわくわく熊本市の授業づくり」3つのポイント

- ①めあて
- ②対話(アウトプット)
- ③振り返り

児童主体の学びとなるように、ICTの効果的な活用を絡めつつ、この3つについてどのような手立てが効果的であるのか、研究授業または日々の授業を通して検証していく。

②学習規律・学習訓練の徹底

- ・幼小中連携「くすのきスタンダード」「くすのきルール」の徹底

③家庭学習習慣の定着

- ・保護者への啓発「家庭学習の手引き」

④個に応じた指導 ドリルパークの活用

- ・「くすのきタイム」…ドリルパーク、文字入力スキルなど
- ・「学びタイム」…計算、コミュニケーション、英語に加えて話の聞き方・伝え方 など

⑤教師の ICT 活用スキルの向上

- ・ICT を活用した実践の共有
- ・日常的な情報交換
- ・ミニ研修の実施

4 研究の内容

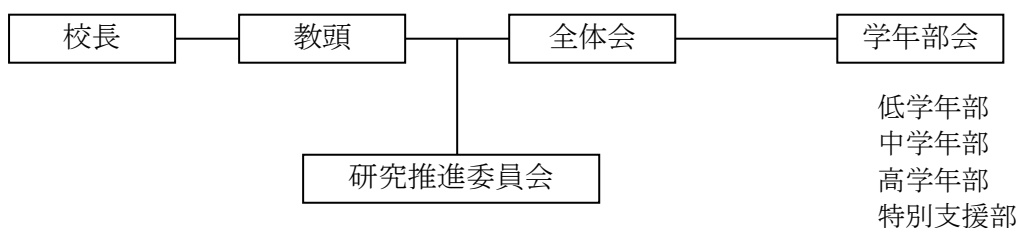
(1) めざす児童像

○学習活動に自ら進んで参加し、友達の考えをしっかりと聞き、自分の考えを表現できる児童

(2) 研究の仮説

教師が「めあて」「対話(アウトプット)」「振り返り」の3つを意識した授業づくりを続け、ICT 機器(タブレット等)を効果的に活用し、子どもたちが共に学び伝え合う場面を意図的に取り入れていくことで、子どもたちの確かな学力向上につながり、将来にまで学び続ける態度を育成することができるであろう。

5 研究の組織



校長・教頭・教務・研究部・研究推進委員

(研究推進委員会)

- ① 校内研究の内容や方法の計画・立案
- ② 研修会・授業研究会を計画・運営
- ③ 研究資料の収集や提供、児童アンケートの集計・分析(学年)
- ④ 学びタイムの計画・運営

(学年部会)

- ① 研究の具現化(実態把握・つきたい力・具体的実践など)
- ② 研究授業についての話し合い